

## 糸魚川淳二名古屋大学名誉教授と豊橋市自然史博物館

松岡敬二<sup>1)</sup>

Emeritus Professor of Nagoya University, Junji Itoigawa and Toyohashi Museum of Natural History

Keiji Matsuoka<sup>1)</sup>

### はじめに

糸魚川淳二先生は1993年3月に名古屋大学を定年退職され、名古屋市から瑞浪市日吉へと拠点を移された。それは、先生の学位論文の対象であった瑞浪層群の分布域であり、すでに石版画等の収集品を展示する半原版画館を1984年に開館されていたからである。自宅に併設された版画館が「日本シデコブシを守る会」での自生地調査、各地の博物館の委員や講師を務めていく基地となった。1998年に名古屋大学病院に入院、胃癌の摘出手術を受けられた。3分の2ともいわれた胃の切除にも拘わらず、術後の回復は早く、血圧も平常値となり、精力的にフィールドワークもこなされていた。それ故、先生の一番弟子であり、共同研究者でもあった故柴田 博名古屋大学名誉教授・元豊橋市自然史博物館館長は、「糸魚川さんは100歳まで生きるよ」と話されていた。2020年に半原版画館での企画展開催中にお会いした時も、お元気だったが、2021年夏に体調を崩され、入院された。弟子たちに会いたいのことで11月4日に一時帰宅されたものの、頑強であった先生でも悪性リンパ腫に勝つことなく11月11日に鬼籍に入られた。

先生は瑞浪市化石博物館建設に中心的に関与され、開館してからも囑託（学芸員）として博物館に助力されてこられた。柄澤(2022)で述べているように「地質・古生物と博物館の二足の草鞋」の始まりである。この

ことが、豊橋市地下資源館、豊橋市自然史博物館とのかかわりに繋がっていった。最初の博物館に関する著書『博物館だより』（糸魚川、1979）は、ヨーロッパの博物館と日本の博物館の現状をまとめたものであった。博物館の基本は「人」、「もの」、「建物」であり、「人」が中心となり「もの」が生かされ、「活きている博物館」となるとされた。先生の博物館論の基本はこの三本柱である。この『博物館だより』に関して「何事も体を張らないでは、本物にならない」との国立科学博物館での実践に基づく書評があり（井尻、1979）、先生の独自の博物館論を発展させていく試金石となった。その原動力は先生の科学者としての根底にあった「ハングリー精神」であったと思っている。次に出版された『続博物館だより 博物館を考える』では、「どんどん博物館をつくりたい、そして、それを、活きている博物館として育てたい」とある。また、先生自身も多くの古生物学者がものを集める収集癖があったように個人コレクションを持ち、それを展示する「わたくし博物館（ミニウム）」（糸魚川、1982）の設立につながられた。このことは、専門域にとどまらず、人生に幅を広げることになる教えととらえている。

先生は、1986年に名古屋大学地球科学教室地史学講座の第三代教授とられた。私はその翌年に理学博士の学位が授与された。10年余にわたって研究指導をしていただいた上、豊橋市自然史博物館へ就職の道を開いていただいた。ただ、開館する博物館なので、研

1) 豊橋市自然史博物館. Toyohashi Museum of Natural History, 1-238 Oana, Oiwa-cho, Toyohashi, Aichi 441-3147, Japan.

原稿受付 2022年12月9日. Manuscript received Dec. 9, 2022.

原稿受理 2022年12月16日. Manuscript accepted Dec. 16, 2022.

キーワード: 糸魚川淳二, 名古屋大学名誉教授, 豊橋市自然史博物館館長, 博物館論.

Key words : Junji Itoigawa, Emeritus Professor of Nagoya University, Director of Toyohashi Museum of Natural History, Itoigawa's museum theory.

究条件など整っていないが3年は辛抱することや、日本学術振興会特別研究員の掛け持ちは許さないとの条件があった。就職して3年経過しても博物館生活は順風満帆ではなかったが、先生が学問、人生において貫かれた「ハングリー精神」を近くで学ばせていただいたおかげで、定年まで勤め上げることができた。先生の教えを消化し実践できたとは思えないが、豊橋市自然史博物館の歴史をたどりながら、先生が関与された事項や、当館について説かれたことを述べることにする。

### 糸魚川淳二先生の略歴

1929年8月21日に岐阜県恵那郡坂下町(現中津川市)に生をうける。1942年4月に恵那中学校に入学され、1945年4月に奈良県高市郡八木町(現橿原市)の海軍経理学校予科へ入校された。戦後恵那中学校第四学年に復学された後、1946年8月退学となり、9月に旧制第四高等学校理科甲類に入学された。旧学制から新学制への移行措置期間となったため1949年3月に卒業し、同年4月に京都大学理学部に入学された。1952年3月に学士試験に合格され、4月には同大学大学院研究奨学生とられた。1957年4月には京都大学理学部大学院に入学、同年8月に退学され、名古屋大学理学部地球科学教室地史学研究室教務員として就職された。1958年2月に助手となり、翌年に田口登美子さんと結婚され、研究に邁進された。1971年5月に助教授、1986年4月教授となり、定年退職の1993年3月まで同職にあった。名古屋大学在職中は1975年に留学生会館運営委員会委員、古川図書館運営協議会総合研究資料館運営委員会委員、1987年総合言語センター共同利用委員会委員、1990年代測定資料研究センター運営委員会委員、1991年評議員、大学院委員会委員を歴任された。定年退職後は、2000年3月まで椋山女学園大学文学部教授を務められた。非常勤講師としては、名古屋大学以外では愛知教育大学、金沢大学、岐阜大学、京都大学、静岡大学、東北大学、新潟大学、鳥根大学、信州大学で教鞭をとられた。

学会は日本地質学会〔斎藤, 2022a〕、日本古生物学会〔延原, 2022a〕、日本第四紀学会〔斎藤, 2022b〕、日本貝類学会〔延原, 2022b〕で評議員、および化石研究会〔松岡, 2022〕と名古屋地学会では会長を務められた。弟子の皆さんが追悼文のなかで学会関連分野の業績について、弟子への指導内容を含めまとめている(□内)。また、柄澤(2022)が糸魚川先生の追悼

文として、専門分野の業績を網羅し、瑞浪市博物館を含め博物館学としての業績も詳しく整理された。1974年に開館した瑞浪市化石博物館を始め、豊橋市自然史博物館、中津川市鉱物博物館、三重県立総合博物館、美濃加茂市民ミュージアム、福井県立恐竜博物館などの博物館建設に関与され、博物館協議会委員などを務められた。

### 豊橋市自然史博物館

1983年3月に豊橋市自然史博物館建設推進会議・同小中学校等研究委員会が結成され、子供自然公園に隣接する名古屋営林局旧二川苗圃(総合動植物公園)内に博物館建設に向けての動きが始まった。4月からの市長選を挟み委員会が本格始動したのは6月以降であった。同年8月24日にはアメリカ・コロラド州のデンバー自然史博物館との友好提携が結ばれ、9月2日には博物館の目玉となるアナトサウルス全身骨格化石購入契約締結(31万ドル:約7,400万円)へと進んだ。恐竜実物化石の真贋等の検査は、名古屋大学理学部地球科学教室地史学研究室の森下 晶教授が当たられた。第21回委員会で博物館展示基本計画が提出された。全体の展示物の監修は、森下 晶名誉教授の後任であった糸魚川淳二教授に引き継がれた。開館準備室がない中、豊橋側の担当である教育委員会教育課の藤城清志主幹との協働により展示物の製作が進められ開館に至った。また、開館に合わせて発行された『ハッピーワールド豊橋市自然史博物館展示案内』(1988年)には、糸魚川先生の『東海の化石』(糸魚川, 1981)を改変して製作された新生代展示室の4枚の古地理図(中新世の海、東海湖、最終氷期の東海地方、縄文時代の東海地方)が掲載されている。

豊橋市自然史博物館は、1988年4月30日午前10時からデンバー自然史博物館前理事長のアラン・フィップス夫妻、ノーグレン理事長夫妻、ウエルズ館長夫妻、マフィー部長を始め、市関係者を迎え竣工式典が開催された。糸魚川先生も展示物監修者として列席された。翌日に開館式典が催され、豊橋市自然史博物館の歴史が始まった。

開館時の豊橋市自然史博物館は、博物館活動に必要な地質関係の図書類もなかった。その状況を踏まえ、森下教授の先代である地史学研究室初代教授であった竹原平一蔵書の一括購入にむけて、糸魚川先生は博物館初代館長となった藤城清志氏とともに尽力された。さらに、博物館の運営、活動が軌道に乗るまで顧問お



第1図. 自然史講座「日本が熱帯だったころ」。



第2図. 自然史講座「動物画・植物画」。

よび学術経験者として博物館協議会委員を平成12年度末(2001.3.31)まで務められた。

教育普及事業の柱の一つとして始まった自然史講座では、第1回講師を糸魚川先生が担われ、演題「化石のはなし」(1988.6.26)に120名の受講者があった。これ以降も「東海地方の化石」(1989.10.22)、「日本が熱帯だったころ」(1990.10.21;第1図)、「最近のヨーロッパの博物館」(1991.10.20)、「動物画・植物画」(1993.10.11;第2図)、「古生物の痕跡をさぐる」(1994.10.10)、「化石はどんなことに役立つ」(1995.10.8)、「化石発見物語」(1996.10.27)、「エコミュージアム」(1997.9.7)、「今自然史博物館が面白い」(1998.9.6)、「展示で博物館を評価する」(1999.8.29)、「宮沢賢治と地質学」(2000.8.27)、「東南アジアのマングローブ沼—I」(2001.12.16)、「中国・恐竜の旅」(2002.7.7)、「熱帯環境—今と昔」(2003.2.16)、「水のお話」(2003.7.6)、「恐竜のいる博物館」(2003.2.15)、「湿地ってなあに」(2004.7.4)、「化石発見物語」(2005.2.6)と10年間にわたって多方面にわたる内容で講演された。

博物館開館から1年遅れの1989年4月5日に、愛知県の博物館登録実地審査が、名古屋大学理学部長の諏訪兼位教授、愛知教育大学木村一郎教授ほか7名により実施され、1989年4月24日に博物館法の規定に基づく登録博物館[博物館法:登録番号第21号]となった。登録にあたり、審査委員の方々に事前に研究分野の機能を持たせるために研究報告の出版を登録要件の一つとされるように差配され、平成元年度第1号の豊橋市自然史博物館研究報告の出版となった。研究報告は学芸員が調査研究の成果を投稿するものである意図を含め、第2号には先生自ら著書「海の古環境の復元—軟体動物化石による—」を寄稿された。

1989年8月1日に豊橋市自然史博物館友の会会則が施行された。これに先立ち、同年7月30日に豊橋市自然史博物館「友の会」設立の役員会、総会が開催され、同設立記念講演会において名古屋大学教授として糸魚川先生が講師を務められた。

中生代展示室全体を利用した「中生代展示室照明演出システム」(1989.7.14)やイントロホールに製作した「ふれて楽しむ化石壁」(1991.1.2)は、新しく追加・改修した展示物である。博物館に入ったイントロホールの左壁面は灰色に統一されたデザインであった。閑散とした単調な印象を与えており、化石に触れる参加体験型の展示物をつくる提案をし、予算化できた。国内外の化石を含む石材の調達先として、岐阜県大垣市の矢橋大理石株式会社を紹介していただいた。当時の自然史系博物館では、今でいうハンズオン展示物は少なかった。そこで来館者の観覧行動なども参考にして、製作に取り組んだ。その結果、「視覚的に魅力的であること、「さわる」という人間の本性に訴える演出である」と展示物として成功している事例として評価していただいた(糸魚川, 1993)。

日本の自然史系博物館の展示現状について、糸魚川(2009a)は「包括的」展示:A(「もの」展示)、B(「こと」展示)、C(「包括」展示)のどの段階にあるか類別している。豊橋市自然史博物館は、多くの自然史系博物館と同様にB(「こと」展示)が中心で、A、C展示要素がある博物館に分類された。中生代展示室の「中生代展示室照明演出システム」や、郷土の自然展示室の「汐川干潟のジオラマ」はC(「包括」展示)とされた。「中生代展示室照明演出システム」は、中生代展示室全体を音と光で「恐竜たちの時代」を3分40秒で演出するもので、30分ごとに展示室の照明が落ちて自動で始まるものであった。アロサウルスとステゴサウルス、中央の桁形の凹部にはドリコリンコプスの全身骨格レ

プリカ、三畳紀・ジュラ紀・白亜紀のジオラマを配した静的な展示室がダイナミックな演出となったとの評価であったが、2008年中生代展示改装とともに撤去された。変更後の壁面の演出は、作る側の意図を伝え、子供たちへの恐怖心を軽減したものになったが、先生の期待に応えるものではなかったと認識している。「汐川干潟のジオラマ」は、ジオラマ背後の光の演出で干潟の一日を表現し、ボタンを押すことで、ジオラマ内の動物にスポットがあたり、説明ナレーションが同調して展示導線中に演出を付加したことからC（「包括」展示）にあたるものとされた。

このように展示物の少なさや閑散とした展示室に、「開館してからすぐ手直し・追加が始まった。収集は多面的に行われ、とくに予算的な裏づけを得て、購入は積極的である」ことから当館の前進的である点の特徴であると講評されている（糸魚川、1993）。

豊橋市自然史博物館は資料の収集・蓄積、準備期間もない中で開館したが、将来的な展示改装を目指し、資料購入費が確保され、収蔵資料が増加することとなった。資料購入にあたって先生は、標本販売会（東京池袋や新宿で開催）や標本所有者のもとへ学芸員と同行し、標本の学術的な鑑定をされた（第3図）。

糸魚川（1990a）「地学系自然史博物館の理想と現実」では、博物館の基礎となる博物館資料「もの」について「いかにものを収集し、保存するかということにつきる。集めるには、いろいろなやり方がある。採集する、買う、寄贈を受ける、つくる（レプリカ）などである」とし、本物が手に入らない場合の代用として十分な効果があるとしてナウマンゾウとヤベオオツノジカ全身骨格レプリカを展示している豊橋市自然史博物館新生代展示室を紹介されている。この指摘の延長上で、常



第3図. 東京ミネラルショー会場。



第4図. 特別企画展「貝類の世界」開場式挨拶。

設展示内にはない恐竜を含む脊椎動物の全身骨格レプリカを購入し、特別企画展で公開し、その後常設展示とする流れとなった。

糸魚川（1990b）では、日本の自然史博物館「問題点と今後の展望」のなかで豊橋市自然史博物館の正面敷地内に実物大の恐竜模型を設置し、野外恐竜ランドとしたことは成功しているとある。それは、「子供たちが恐竜にのぼり、ぶらさがって遊んでいるが、このことは、館内で展示を見ること、学習室で本を読むことと同じほど、大切であろう」と博物館が学びの場とともに、遊びの場が共存する時代に変化がうかがえると述べている。ただし、学びと遊びの比率は7対3くらいが適当であろうと論評している。

第4回特別企画展「貝類の世界」（1990.7.20）および第8回特別企画展「地球たんけん－地球・日本列島の生い立ちをさぐる－」（1994.7.15）の開場式において、先生は名古屋大学教授および顧問として特別企画展の見どころをまじえて挨拶された（第4図）。

第94回化石研究会豊橋例会（1990.1.10～11）では豊橋市自然史博物館講堂において、特別講演、ミニシンポジウム「陸環境の復元」、「海環境の復元」が開催され、先生は後者の中で「貝類を使って」と題して実践例を発表された。

1991年5月28日には、愛知県知多郡美浜町の農地整備で現れた師崎層群の露頭から化石が見つかった。重機を使い魚やウニ化石を含む岩石ブロックの採集にあたり、先生は現地に向かわれ指導された（第5図）。この時採集されたウニ化石岩石ブロックは、第19回特別企画展「恐竜後の世界－よみがえる新生代の生き



第5図. 師崎層群の化石発掘現場 (美浜町切山).

ものたち」(2004.7.16～9.12)で展示され、2016年改装された新生代展示室の新第三紀コーナーに展示している。

第5回特別企画展「よみがえる古生代の生きものたち」(1991.7.19～9.1)では、古生代デボン紀、石炭紀及びペルム紀の時代の化石展示が計画された。前年度に、高山市奥飛騨温泉郷福地にある「ひだ自然館」の主催者である山腰 悟氏から、先生の便宜により化石を購入することができた。また、福地の層孔虫は奥様(糸魚川登美子, 1991.1.2)の名前で寄贈していただいた。この時入手した福地産化石は、2004年4月29日に改装された古生代展示室に常設化された。

半田市立博物館で1991年7月20日から開催された特別展「化石の世界－東海地方の化石－」では、糸魚川先生が展示物の手配・監修、特別展図録の執筆を担当された(半田市立博物館編, 1991)。展示物の中には先生の個人コレクション及び豊橋市自然史博物館の収蔵資料も含まれている。

1991年に千葉県立中央博物館で第140回日本古生物学会例会が開催された。その中で糸魚川淳二・濱田隆士両先生がコンビナーとなり「新しい自然史学と博物館」というシンポジウムを企画され(糸魚川・濱田, 1991)、開館2年目の公立館学芸員として私に発表する場を与えていただいた。当時の博物館における地質・古生物学系学芸員の研究の現状を公表する場となった(松岡, 1991)。さらに、学芸員が学会活動の一翼を担い、豊橋市自然史博物館の知名度を上げることとなった。学芸員の研究は、博物館としての役割を果たすものであるということを、行政内で理解してもらえ一助にもなった。第94回・第114回・第132回化石研究会例会(1991, 2000, 2009)、日本貝類学会平成7年度・

平成15年度・平成19年度、平成25年度大会(1995, 2003, 2007, 2013)、日本古生物学会第146回・第164回例会(1995, 2015)などの学会誘致へと繋がった。中でも日本貝類学会の開催は、糸魚川先生が学会の評議員であったことと、京都大学時代の貝類分類学の師であった波部忠重博士が日本貝類学会会長であったことも誘致成功の要因であった。

1992年4月1日から豊橋市総合動植物公園開園に伴い、自然史博物館入館料が総合動植物公園入園料に一本化された。平成元年に誕生していた自然史博物館友の会は、8月1日から発展的解消となり、豊橋総合動植物公園友の会となった。

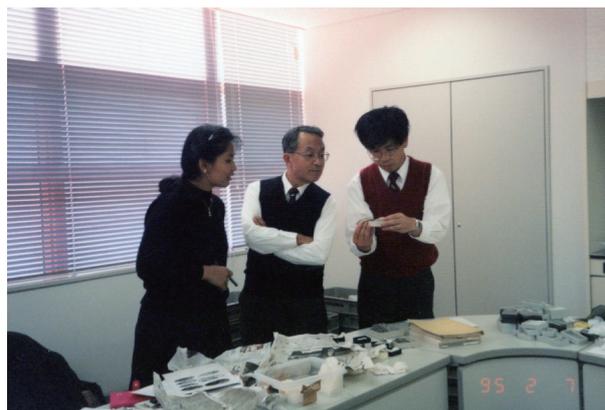
北設楽郡東栄町化石調査(1992.5.24; 6.2; 6.18; 7.8, 9; 7.11, 12; 7.15; 8.20; 8.28, 29)にあたり、糸魚川先生は設楽層群の層理面に残された足跡化石調査の全般にわたって指揮をとられた。その成果は、地学団体研究会名古屋支部・岐阜支部・刈谷支部主催で名古屋大学において「足跡化石シンポジウム」(1993.3.7)として開催され、先生が主旨説明をされた。設楽層群の足跡化石については、1995年3月25日にオープンした「郷土の自然展示室」の郷土の地形・地質コーナーの中央部に層理面に残された足跡化石のレプリカとして常設展示された(松岡ほか, 1993)。

先生は、1993年3月末で名古屋大学を定年退職された。退職記念品とされた著書『日本の自然史博物館』においては、地球の歴史と生物の進化をメインテーマとして、郷土の自然へ繋がる展示構成から、豊橋市自然史博物館は「一般性と地域性の両方の展示をもった博物館」とされた。

開館5周年を記念した第7回特別企画展「今よみがえる恐竜の世界」(7.16-9.19)は、デンバー自然史博物館から初公開の恐竜の大腿骨やデンバーサウルスの頭骨化石を借用し、開催された(第6図)。これらに加えて、この時に購入したティラノサウルスとトリケラトプスの全身骨格を中心に新しくできた特別企画展示室にて展示した。この特別企画展のポスター作成にあたり、宣伝効果の高まるようにデザイン・配色へ助言された。解説図録ではI, VI, VII章を執筆された。ティラノサウルスとトリケラトプスの全身骨格レプリカは、展示室の改装に向かって動き出す契機となった1998年のオリエンテーションホールの改装の主展示物となった。改装後のオリエンテーションホールは、自然史スクエア(柴田 博元館長の命名)に改称した。また、5周年記念に開催したシンポジウムI「恐竜の謎にせまる」(7.4)では総合討論の座長を務められ、



第6図. 特別企画展「今よみがえる恐竜の世界」開場式挨拶。



第8図. ネパール人留学生グルンさんの指導。



第7図. 開館五周年記念シンポII「飛び出せ恐竜たち」。

同シンポジウム講演資料集の編著者、同II (7.25)「飛び出せ恐竜たち」では、子供たちの恐竜についての研究発表の講評や質疑応答もされた(第7図)。11月25日・26日に豊橋市自然史博物館講堂にて開催された第18回東海三県博物館協会交流研修会では、最新の博物館の資料の基づいた「これからの博物館」と題して講演された。

1994年9月12日から19日にわたって糸魚川先生はロシア・ヤクーツクに担当学芸員と出張となった。市制90周年記念の1996年に開催した『ロシアのマンモス』展のケナガマンモス全身骨格、およびマンモス動物群の化石借用交渉のためのものであった。

1995年2月7日に島根大学汽水域研究センター教授高安克己氏と留学生グルン・ダヤマンティ (Grung, D.)氏がネパールのシワリク層産貝類化石の研究相談にこられた時に、先生は標本を見ながら、分類や研究についてアドバイスされた(第8図)。グルン氏は、このシワリク層の軟体動物化石の研究で学位を修得し、母国トリブバン大学で職を得た。シワリク層の淡水貝類

化石は豊橋市自然史博物館に保管されている。

開館に合わせて発行された『豊橋市自然史博物館展示案内』は版を重ねたが、日本生命財団の助成を受け1996年3月20日に『豊橋市自然史博物館総合案内』として新版の発行となった。先生は発行にあたり編集委員の筆頭としての任を果たされた。

市政施行90周年特別企画展プレシンポジウム「大進化」を1996年6月23日に開催した。シンポジウムの主催者挨拶に次ぎ、椋山女子学園大学教授として糸魚川先生がシンポジウム趣旨説明と、総合討論のコーディネーターとして進行に助力された。

第12回特別企画展「貝-美しい形と模様」の解説ボランティア研修(1997.6.25)では、糸魚川先生が博物館の概論について講義された。

全日本博物館学会主催の1999年総会・第25回研究大会(1999.6.12～13)が豊橋市自然史博物館で開催され、記念講演会講師として糸魚川先生が「博物館展示-見る側とつくる側」と題して講演された。この時の博物館展示の在り方について考える視点は、2001年から始まる古生代展示室改装で創出した「二段展示」へとつながった(松岡, 2016)。

糸魚川淳二著『新しい自然史博物館』では、開館7年で「郷土の自然展示室」を増築・全面改装したことや、特別企画展、教育普及行事、ボランティアの導入に関して博物館の積極性を評価された。一方で、平成4年度から豊橋市自然史博物館と豊橋動物園が一体化して複合施設、豊橋総合動植物公園となったことから、入館者数が年間50万人となり、入館者の来館目的の変化がおこった。動物園の娯楽の延長ではなく、博物館の本来の活動は維持するようにとの助言があった。この視点は、開館時に豊橋市自然史博物館の動く恐竜ロボット(動刻:科学的に復元された模型とはいえない)

の設置は、展示室ではなく入口であれば「許容範囲」とされた意味と同じものと思っている。

第1回の豊橋市自然史博物館資料収集委員会は2000年5月10日に開催され、資料収集委員会設立、資料収集委員会要綱について説明された。資料収集委員は地学・動物・植物分野各一名からなり、地学分野の委員に糸魚川先生が選任された。

豊橋市自然史博物館において開催された第18回化石研究会の総会・学術大会(2000.5.20～21)において、シンポジウム「東海層群－研究の現状」が実施された。古くから名古屋大学地球科学教室地史学研究室で取り組んできた東海層群に関する最新研究成果を踏まえた発表と、総合討論が行われた。糸魚川先生は冒頭の主旨説明をされた。この成果は豊橋市自然史博物館研究報告第11号(2001)にまとめられた。

教育長が兼務していた博物館館長職を2001年4月1日より、糸魚川先生が専任非常勤館長に任命され、豊橋市第4次基本構想・基本計画に基づく博物館整備事業が始まった。また豊橋市自然史博物館は、石巻自然科学資料館を附属施設として、教育委員会の独立した課となり、博物館の組織体制刷新にも尽力された。平成15年文部科学省公示第113号に公布された「公立博物館の設置及び運営上の望ましい基準」の改正項目「博物館の質の向上に関する規定の整備」に符合する学術的にも適任館長設置となった。専任館長として、整備事業における設計業務の補佐・助言、博物館の教育普及事業、表彰式では授与者も務められた。館長職は2004年3月末で終了し、故柴田 博名古屋大学名誉教授へ引き継がれた。

糸魚川先生が収集され、研究にも使われた国内外の化石2,500点(2006.3.26)、マングローブの貝類、穿孔貝類5,400点(2006.3.23)を豊橋市自然史博物館に寄贈された。一部は、新生代展示室改装時に常設化した。「寒冷化と現生種の出現－鮮新-更新世－」コーナーの陶土層の植物化石では、岐阜県土岐市産のオオミツバマツ *Pinus fujii* の松ぼっくり(第9図)および「繰り返される氷期・間氷期－第四紀－」コーナーの「完新世に絶滅した貝類」において、豊川市小坂井町産のビョウブガイ *Trisidos kiyonoi* がある(第10図)。この標本は先生が小坂井泥層の貝類相の研究に使われたものである(Itoigawa, 1964)。

博物館学(「僕は博物館学を講じているのではなく、私の考える博物館論を説いている」としての総体性は「包括的博物館」であると述べている(糸魚川, 2009a)。先生の考える博物館論は、「つなぐ」、「まと



第9図. 新生代展示室のオオミツバマツ(中央)。



第10図. 新生代展示室のビョウブガイ(中段中央)。

める」、「包み込む」を基本理念とし、「立体的ネットワーク博物館」としている。

この先生の博物館論の根底は、ヨーロッパで生まれたエコミュージアムの概念を美濃加茂地域、名古屋市東山地区、瑞浪市北部地方にあてはめ、日本版に再検討した「えこ」ミュージアムである(糸魚川, 2009b)。特に先生の居住空間でもある瑞浪市北部地域は、要点ともなっている「人と自然のかかわり」において、絶滅危惧種のシデコブシヤ化石を守る保全活動が進められており、瑞浪市化石博物館がその活動のコアとなっている。エコミュージアムの運動の推進は、「最終的に市民の意識に依存している」と結ばれている。私もコアとなる豊橋市自然史博物館がある二川地域にエコミュージアム導入の条件の揃った場として提案したことがある(松岡, 1996)。しかし、教えのように地域社会のなかでエコミュージアムのめざす「市民にとって楽しい場であり、学習の場である」というところま

で二川地域の市民に共感される段階に達しなかった。

豊橋市自然史博物館の改装された古生代・中生代展示室における、古生代展示室、エドモントサウルス展示室、中生代展示室の各展示室を結んでの「複合交差型展示」(松岡, 2008)は、「直線的な展示ではなく、離れたアイテムをつなごうとするセンスはある意味で『包括的』につながるであろう」と評された。中断している新生代展示室と改装の終わった展示室とのつながりは、「終わった2つの展示にこだわらず、たどりながら新しい方向へ向かうことが望まれる」とされ、博物館のテーマである地球・生物の進化への「生まれる－変わる－発展する」との指針を示された(糸魚川, 2010)。2016年に改装が終了した新生代展示室は、地球の歴史・生物の進化をたどりながら豊橋総合動植物公園内の生き物たちにつなげ、私たち人類の未来に思いをさせ、「体感するリンク展示」とする構成とした。先生が説かれた博物館論「包括的博物館」の域へ舵を切ったと考えている。

## 謝 辞

糸魚川淳二先生には名古屋大学理学部地球科学教室地史学研究室在籍時から研究指導をしていただき、1987年に名古屋大学で理学博士を修得した時の主任教授であった。豊橋市自然史博物館への就職、結婚にあたり仲人も引き受けていただいた。就職した後も公私にわたって助言・激励・叱責をいただいた。また、先生の節目ごとに化石・現生貝類標本などを自然史博物館に寄贈され、亡くなった後は学会誌を奥様により配分できるように手配されていた。先生同様心遣いをいただいた奥様の糸魚川登美子さんに感謝申し上げる。

最後に本稿寄稿にあたり便宜を図っていただいた糸魚川先生の弟子の方々や、豊橋市自然史博物館開館からともに活動してきた職員の皆様にお礼申し上げます。

## 引用文献

- 半田市立博物館編, 1991. 特別展化石の世界－東海地方の化石－. 半田市立博物館, 半田市, 62 p.
- 井尻正二, 1979. 「博物館だより」とその書評を読んで. そくほう (地学団体研究会), (315) : 7.
- Itoigawa, J., 1964. Quaternary molluscan fauna of the Kozakai mud, Kozakai, Aichi Prefecture, Japan. *Journal of earth sciences, Nagoya University*, 12: 117-127.
- 糸魚川淳二, 1979. 博物館だより ヨーロッパに原点をもとめて. 共立出版, 東京, 220 p.
- 糸魚川淳二, 1981. 東海の化石 太古の生きものたち. 中日新聞本社, 名古屋, 243 p.
- 糸魚川淳二, 1982. 続博物館だより 博物館を考える. 共立出版, 東京, 194 p.
- 糸魚川淳二, 1990a. 地学系自然史博物館の理想と現実. 地質ニュース, (431) : 7-10.
- 糸魚川淳二, 1990b. 日本の自然史博物館－これからどうするか. UP, 19 (5) : 19-25.
- 糸魚川淳二, 1993. 日本の自然史博物館. 東京大学出版会, 東京, 230 p.
- 糸魚川淳二, 1999. 新しい自然史博物館. 東京大学出版会, 東京, 232 p.
- 糸魚川淳二, 2009a. 包括的展示論. 瑞浪市化石博物館研究報告, (35) (Supplement) 特集「博物館－現在と未来－」: 37-51.
- 糸魚川淳二, 2009b. 自然史博物館から「えこ」ミュージアム. 瑞浪市化石博物館研究報告, (35) (Supplement) 特集「博物館－現在と未来－」: 83-92.
- 糸魚川淳二, 2010. 包括的博物館－21世紀の博物館像－. 瑞浪市化石博物館研究報告, (37) : 91-126.
- 糸魚川淳二・濱田隆士, 1991. 自然史学のこれからと博物館. まえがき. 月刊地球, 13 (11) : 687-688.
- 柄沢宏明, 2022. 地質古生物と博物館－二足の草鞋を履いた自然科学者. 瑞浪市化石博物館研究報告, (49) : 1-20.
- 松岡敬二, 1991. 博物館ネットワークの提唱. 月刊地球, 13 (11) : 732-735.
- 松岡敬二, 1995. 豊橋エコミュージアム構想. 生命誌(biohistory), 3 (4) : 11.
- 松岡敬二, 2008. 展示改装に導入した「複合交差型展示」. 展示学, (46) : 32-33.
- 松岡敬二, 2016. 利用の観点に立った展示改装. 国際シンポジウム「ともに成長する博物館」. 国立科学博物館. 要旨集: 18-19.
- 松岡敬二, 2022. 糸魚川先生の思い出. 化石研究会誌, 55 (1) : 31-33.
- 松岡敬二・柄沢宏明・吉村暁夫・家田健吾・設楽研研究グループ, 1993. 愛知県北設楽郡東栄町の設楽層群から発見された足跡化石. 豊橋市自然史博研報, (3) : 27-36.
- 延原尊美, 2022a. 糸魚川淳二先生のご逝去を悼む. 化石, 12 : 22-24.
- 延原尊美, 2022b. 糸魚川淳二先生のご逝去を悼んで. ちりぼたん, 52 (2) : 212-216.
- 齊藤 毅, 2022a. 名誉会員糸魚川淳二先生を偲んで. 日本地質学会 News, 25 (2) : 17.
- 齊藤毅, 2022b. 糸魚川淳二先生を偲んで. 第四紀通信, 29 (1) :

5-6.

豊橋市自然史博物館, 1988. ハッシーワールド豊橋市自然史博物館総合案内. 豊橋市自然史博物館, 豊橋市, 56 p.

豊橋市自然史博物館編, 1996. 豊橋市自然史博物館総合案内. 豊橋市自然史博物館, 豊橋市, 87 p.